

## 第1章

# 子どもとの関係・父親の ペアレンティング

高岡 純子



第1節

# 子どもと一緒に過ごす時間

まず、子どもと父親の関係からみていくことにする。平日・休日それぞれに、父親はどの程度の時間を子どもと一緒に過ごしているのだろうか。父親の理想とする時間との間に差はあるのだろうか。

図1-1-1は、平日に子どもと一緒に過ごす実際の時間と理想の時間を示したものである(経年比較)。05年も09年も平日に子どもと一緒に過ごしている実際の時間は「1時間～2時間未満」がもっとも多く、05年で27.0%、09年で26.9%であった。「1時間～2時間未満」をピークに、「30分～1時間未満」「2時間～3時間未満」がそれぞれ2割前後と広がっている。09年では、1時間未満の比率は37.1%、2時間以上36.1%である。4年前の05年調査の結果と比較するとほぼ同じ数値であり、子どもと一緒に過ごす時間は4年間で変化はみられない。一方、理想とする時間は、ピークが「2時間～3時間未満」で09年34.5%、05年32.5%である。これも4年前とほぼ同様である。もっと子どもと一緒に過ごしたいと思いつつながら、過ごせないでいる父親の様子は、4年間でほとんど変わっていない。

次に、休日に子どもと一緒に過ごす時間の実際と理想についてみてみよう(図1-1-2)。休日に子どもと一緒に過ごす実際の時間は、09年は「10時間～ほぼ1日」がピークで51.6%である。理想とする時間も「10時間～ほぼ1日」で54.6%であることから、多くの父親が休日にはほぼ理想どおりに子どもと一緒に過ごしていることがわかる。05年も同様の傾向であり、4年間で休日の子どもと一緒に過ごす時間にも変化はみられなかった。平日に子どもと一緒に過ごす時間が少ないため、休日には多くの時間を子どもと一緒に過ごしている様子がうかがえる。

平日に子どもと一緒に過ごす時間は、父親の帰宅時間の影響を受けていると思われるため、関連をみてみたい。表1-1-1は、平日の帰宅時間ごとに子どもと一緒に過ごす時間をみたものである。帰宅時間が18時より前では、子どもと一緒に過ごす時間のピークは「4時間以上」、18時台では「2時間～3時間未満」である。19時台になると、ピークの時間は「1時間～2時間未満」であり、20時台の帰宅では、「0分～1時間未満」になる。21時以降に帰宅する父親は、全体の約4割を占めているが、子どもと一緒に過ごす時間が「0分～1時間未満」である比率は61.7%、1時間以上が38.3%となっており、21時以降に帰宅する父親の約6割は毎日1時間未満しか子どもと一緒に過ごしていない。一方、帰宅時間が18時より前の父親は、子どもと一緒に過ごす時間が「0分～1時間未満」の比率は6.4%と1割に満たない。平日の帰宅時間が遅くなると、子どもと一緒に過ごす時間も徐々に少なくなっている様子がよくわかる。

図1-1-1 平日に子どもと一緒に過ごす時間の「実際」と「理想」(経年比較)

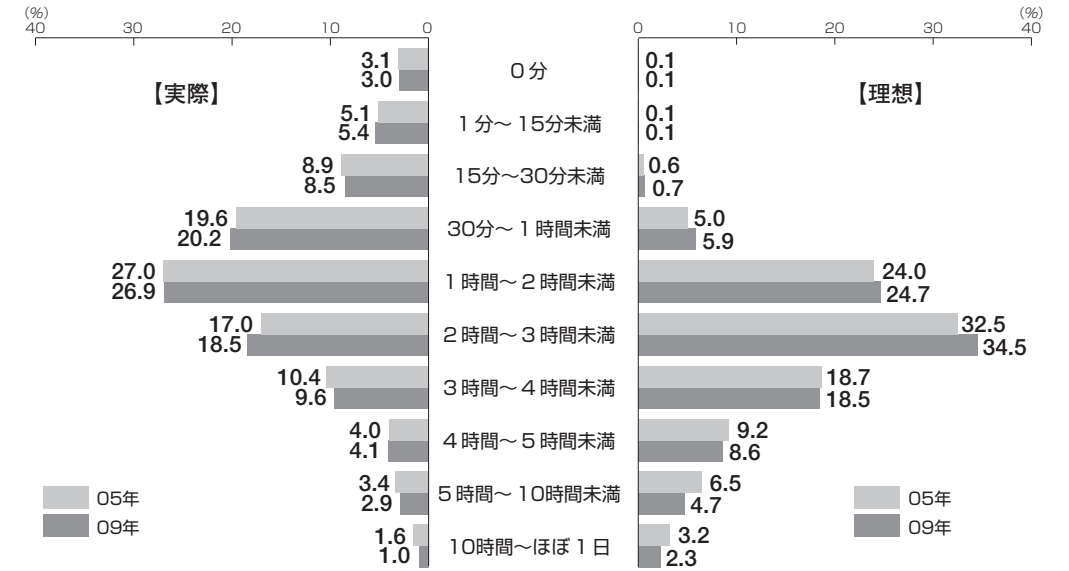


図1-1-2 休日に子どもと一緒に過ごす時間の「実際」と「理想」(経年比較)

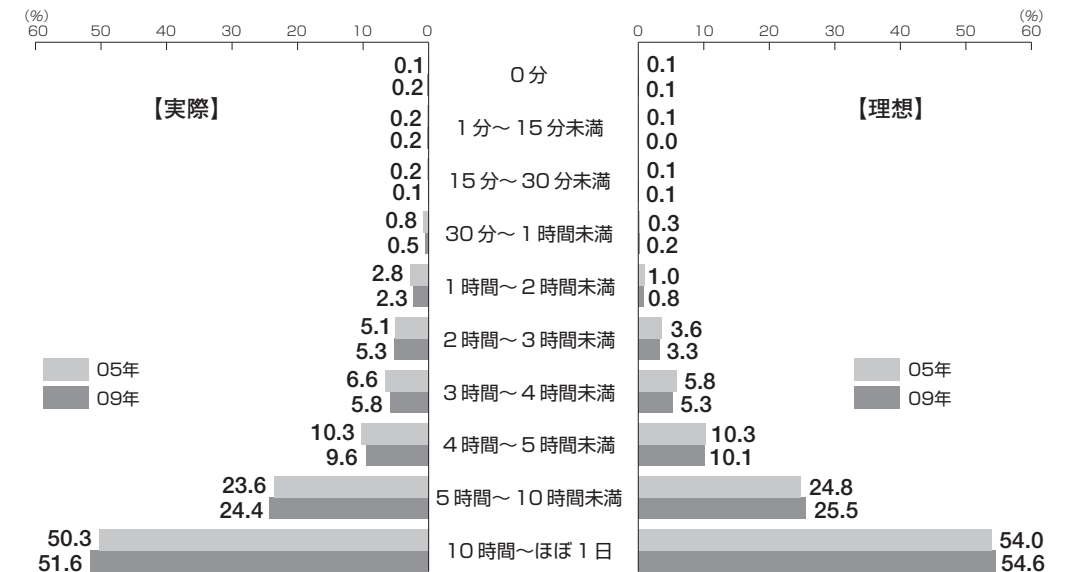


表1-1-1 平日に子どもと一緒に過ごす時間(帰宅時間別)

		(%)				
		0分～1時間未満	1時間～2時間未満	2時間～3時間未満	3時間～4時間未満	4時間以上
父親の帰宅時間	18時より前 (299)	6.4	16.1	25.4	18.1	34.1
	18時台 (574)	9.6	19.5	29.6	24.2	17.1
	19時台 (901)	19.8	31.5	29.4	12.3	7.0
	20時台 (955)	35.6	34.8	20.5	6.6	2.5
	21時以降 (1,766)	61.7	25.0	7.2	2.9	3.2

注1) 現在の職業で「無職」「その他」回答者は集計母数から除外。

注2) ( )内はサンプル数。

注3) ■は最大値。

第2節

# 家事・育児のかかわりと理想

## ◆父親がかかわっている家事・育児は、4年前とほとんど変わらない◆

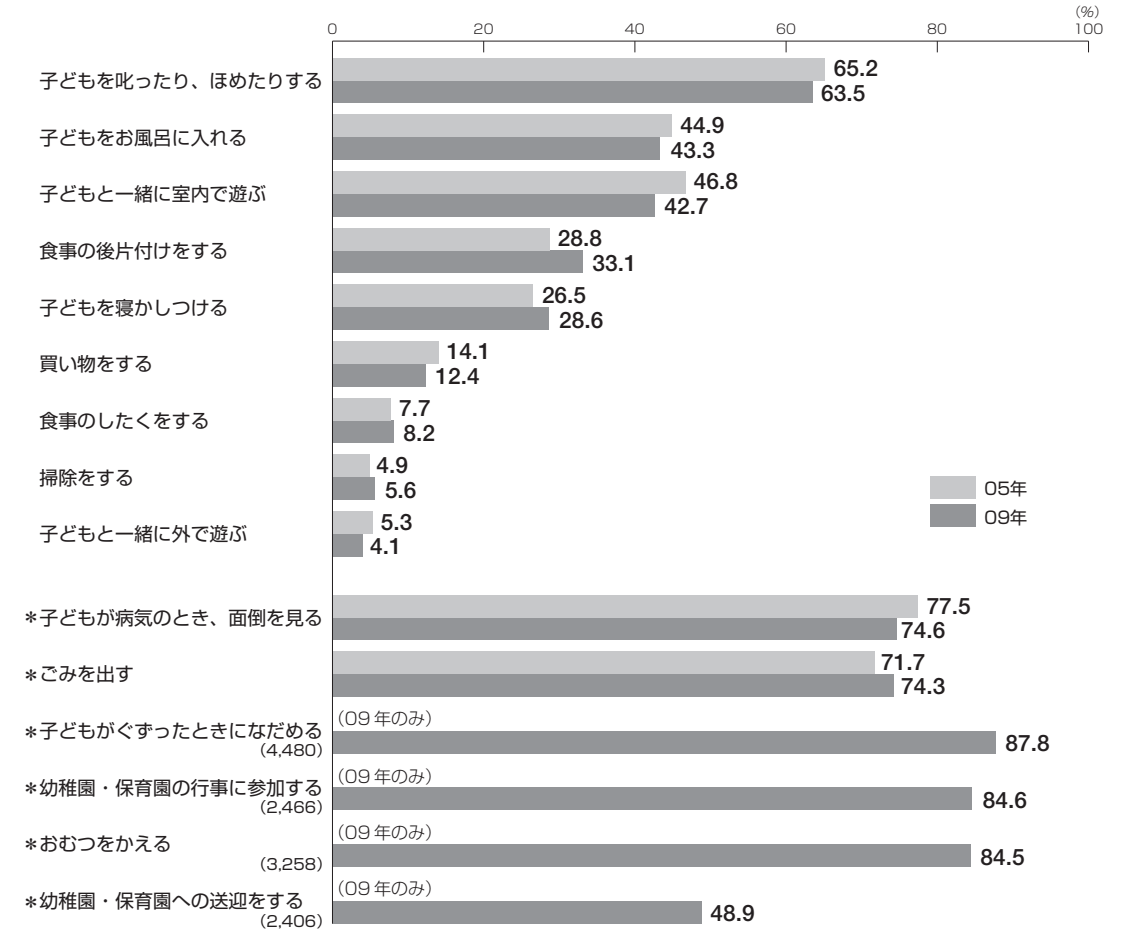
この節では、父親の家事・育児への参加の程度について、実態や意欲をみていきたい。家事・育児に関する項目について、参加の程度をきいたものが図1-2-1である。経年比較できる項目でみると、「ほとんど毎日する」+「週に3～5日する」と「いつもする」+「ときどきする」の09年の合計数値が高い順から、「子どもが病気の時、面倒を見る」(74.6%)、「ごみを出す」(74.3%)、「子どもを叱ったり、ほめたりする」(63.5%)となっている。一方、下位では「食事のしたくをする」(8.2%)、「掃除をする」(5.6%)、「子どもと一緒に外で遊ぶ」(4.1%)である。下位の項目をみると、帰宅時間の遅い父親にとって取り組むことが難しい内容が並んでいる。上位の項目は、忙しい中でも短時間でできるものや一時的にかかわれる家事・育児の項目が多い。05年と比較すると、ほとんどの項目で変化はみられなかった。「子どもと一緒に室内で遊ぶ」は4.1ポイント減少し、「食事の後片付けをする」は4.3ポイント増加した。全体として父親の家事・育児への参加は4年間であまり進んでいないようである。

## ◆保育園児の父親は、家事・育児にかかわる比率が高い◆

家事・育児へのそれぞれの参加の程度をまとめて、家事・育児の参加合計得点を出した。家事に対する5項目、育児に対する6項目について「ほとんど毎日する(いつもする)」を4点、「週に3～5回する(ときどきする)」を3点、「週に1～2回する(あまりしない)」を2点、「ほとんどしない(ぜんぜんしない)」を1点として、合計得点を出し、人数がほぼ均等になるように3つのグループに分けた(得点の低いグループより、低群、中群、高群)ものが図1-2-2である。

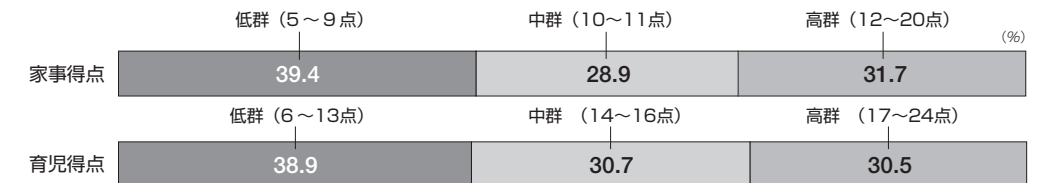
子どもの就園状況別に家事・育児得点の傾向をみてみよう。表1-2-1は、幼稚園児、保育園児、未就園児別に傾向をみたものである。家事得点高群の比率がもっとも高いのは保育園児で、もっとも低いのは幼稚園児である(保育園児46.5%、未就園児30.4%、幼稚園児24.3%)。育児得点でも同様の傾向であり、保育園児41.5%、未就園児32.7%、幼稚園児20.8%であった。子どもが保育園児の場合は、妻が仕事を持っている比率が高く、父親も家事や育児に参加している様子がうかがえる。幼稚園児の場合は、専業主婦の比率がやや高く、父親の家事・育児へのかかわりはやや低くなるため、家事・育児得点も低くなると思われる。

図1-2-1 現在、父親がかかわっている家事・育児(経年比較)



注1) 「ほとんど毎日する」+「週に3～5日」の%。  
 注2) \*は「いつもする」+「ときどきする」の%。  
 注3) 09年だけの項目は「該当しない」を設けており、回答者は集計母数から除外。  
 注4) ( )内はサンプル数。

図1-2-2 家事・育児の得点化



注) 「家事得点」「育児得点」は、図1-2-1の家事に関する5項目、育児に関する6項目を得点化し、各群のサンプル数がおよそ3分の1ずつになるように設定した(図1-2-1で09年だけの項目は、母数が異なるため得点化からは外している)。

表1-2-1 家事・育児得点(就園状況別)

	家事得点			育児得点		
	低群	中群	高群	低群	中群	高群
幼稚園児 (1,557)	50.0	25.7	24.3	47.5	31.7	20.8
保育園児 (936)	26.4	27.1	46.5	29.2	29.4	41.5
未就園児 (2,034)	37.5	32.1	30.4	36.8	30.4	32.7

注) ( )内はサンプル数。

◆「家事や育児に今以上にかかわりたい」と思う父親は54.2%◆

家事・育児に今以上にかかわりたいと思うかについてきいた（図1-2-3）。09年では、約半数の54.2%が「はい」と答え、9.4%が「いいえ」、36.4%が「どちらともいえない」と回答している。05年と比較すると、「はい」と回答する比率が6.3ポイント増加している（05年「はい」47.9%）。

図1-2-4は、「家事や育児に、今以上にかかわりたいと思いますか」という質問に「はい」と回答した54.2%の父親に、「もっとかかわりたいと思っているもの」についてきいたものである（16項目から3つまで選択）。もっとかかわりたいと思う家事・育児は、多い順から「子どもと一緒に外で遊ぶ」（74.3%）、「子どもと一緒に室内で遊ぶ」（44.1%）、「子どもをお風呂に入れる」（29.4%）である。下位項目は「食事の後片付けをする」（6.4%）、「おむつをかえる」（2.5%）、「ごみを出す」（1.9%）である。今以上にかかわりたい項目は、上位に育児に関する内容が並んだ。05年の上位3項目は、「子どもと一緒に外で遊ぶ」「子どもと一緒に室内で遊ぶ」「子どもを叱ったり、ほめたりする」であり、ほぼ同様の傾向である（図表省略）。第1位の「子どもと一緒に外で遊ぶ」は、平日の場合、帰宅時間を早めないといけない項目である。前述したように、約4割の父親が毎日21時以降に帰宅していることから、実現するには、時間がかかるだろう。

◆父親の自己評価では、家事で4割、育児で5割が「よくやっている」（「非常によくやっている」＋「よくやっている」）と回答している◆

家事・育児の自己評価と妻がどう自分を評価するかについての考えをきいた（図1-2-5）。「あなたは、ご自分で家事（育児）をどのくらいやっていると思いますか」という質問に「よくやっている」（「非常によくやっている」＋「よくやっている」、以下同）と回答した父親は、家事で39.9%、育児で53.4%であった。一方、「あなたの配偶者は、あなたの家事（育児）について、どのように思っていると思いますか」という質問に「よくやっている」と回答した父親は、家事で48.0%、育児で58.2%であった。父親自身の自己評価と比べると、家事では、自己の肯定的評価よりも妻が自分をどう評価していると思うかのほうが8.1ポイント高かった。育児でも、自己の肯定的評価よりも妻が自分をどう評価していると思うかのほうが4.8ポイント高かった。家事・育児いずれにおいても、自己の肯定的評価よりも、妻からのほうがより高く自分を評価していると考えているようである。

次に、家事・育児の自己評価と子どもの就園状況との関連をみてみよう（表1-2-2）。家事・育児ともに、「よくやっている（「非常に」＋「よくやっている」）」という自己評価がもっとも高いのは保育園児の父親である。家事では、保育園児50.4%、幼稚園児34.0%、未就園児39.4%であった。育児では、保育園児62.1%、幼稚園児46.9%、未就園児53.9%である。保育園児の父親は、前述の家事・育児得点が幼稚園児や未就園児の父親よりも高いため、この傾向は実態に即していると思われる。

図1-2-3 家事や育児に今以上にかかわりたいか（経年比較）

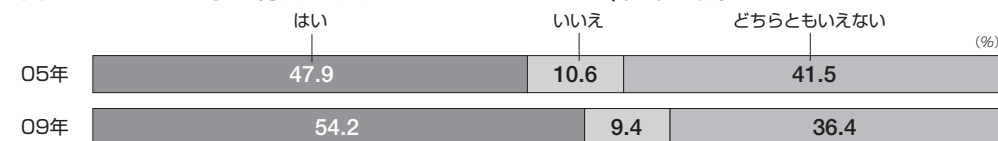
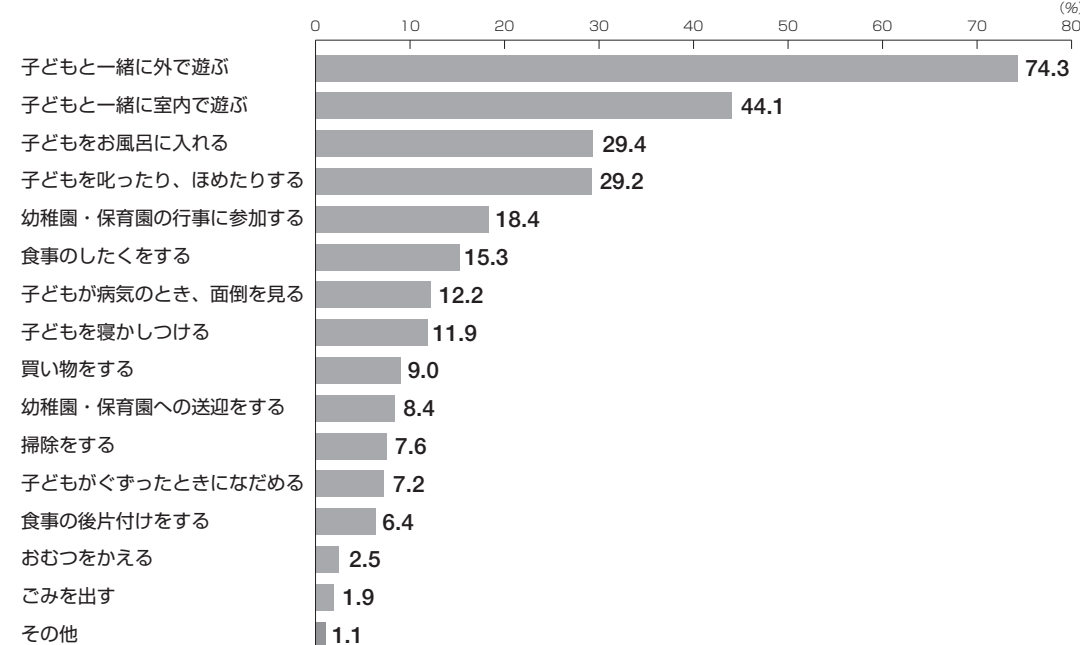


図1-2-4 もっとかかわりたいと思っている家事・育児



注1) 「あなたは家事や育児に今以上にかかわりたいと思いますか」に「はい」と答えた父親を対象とする。  
 注2) 複数回答（3つまで）。  
 注3) サンプル数は2,479人。

図1-2-5 家事・育児の自己評価・妻が、自分をどう評価していると思うか

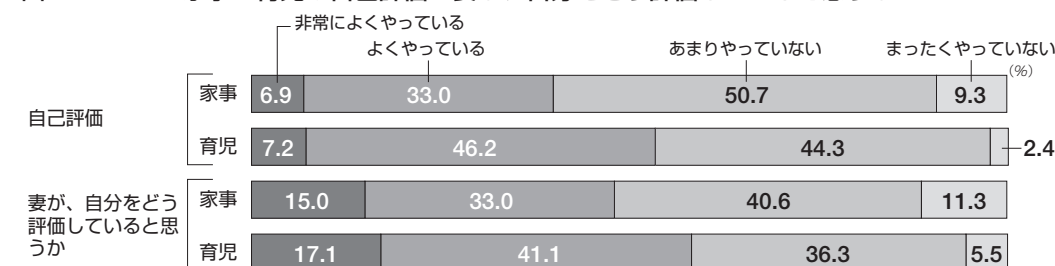


表1-2-2 家事・育児の自己評価（就園状況別）

	家事の自己評価		育児の自己評価	
	非常に+よくやっている	あまり+まったくやっていない	非常に+よくやっている	あまり+まったくやっていない
幼稚園児 (1,557)	34.0	66.0	46.9	53.1
保育園児 (936)	50.4	49.6	62.1	37.9
未就園児 (2,034)	39.4	60.6	53.9	46.1

注) ( ) 内はサンプル数。

## 第3節

## 父親のペアレンティング

## ◆父親であることを最初に実感したのは、「初めて子どもの顔を見たとき」「初めて子どもを抱いたとき」「妊娠したことを妻から知らされたとき」◆

父親は、どのように自分自身が父親であることを実感するのだろうか。最初に父親であることを実感したときについてきいたものが図1-3-1である。これを見ると、09年で多かったのは「初めて子どもの顔を見たとき」(32.3%)、「初めて子どもを抱いたとき」(25.6%)、「妊娠したことを妻から知らされたとき」(17.0%)の順であり、子どもが生まれてから父親であることを初めて実感する項目が上位にきていることがわかる。05年と比較しても各項目の傾向にほとんど変化はみられなかったが、第3位の「妊娠したことを妻から知らされたとき」は、05年よりも09年のほうが5.0ポイント増加している(05年12.0%→09年17.0%)。

## ◆理想的な父親のイメージは、「頼りになる」「尊敬できる」「相談にのれる」◆

父親自身は、どのようなイメージを理想として持っているのだろうか。図1-3-2は、理想の父親イメージについてみたものである。05年と09年ではほとんど傾向に変化はみられなかった。理想的な父親イメージとして多かったのは、「頼りになる」「尊敬できる」「相談にのれる」「理解がある」などである。父親として、子どもから頼られたり、尊敬されたりする存在であることは、4年前から一貫して父親の理想的なイメージのようである。

子どもの性差によって父親の理想的なイメージは変わるのだろうか。図には示していないが、男子のほうが多い項目では、「威厳がある」(男子20.4%>女子16.5%で3.9ポイント差)である。女子のほうが多い項目は、「やさしい」(男子16.8%<女子21.6%で4.8ポイント差)であった。男の子どもに対しては威厳がある存在であり、女の子どもにはやさしい父親でありたいという思いがうかがえる。

図1-3-1 父親であることを最初に実感したとき(経年比較)

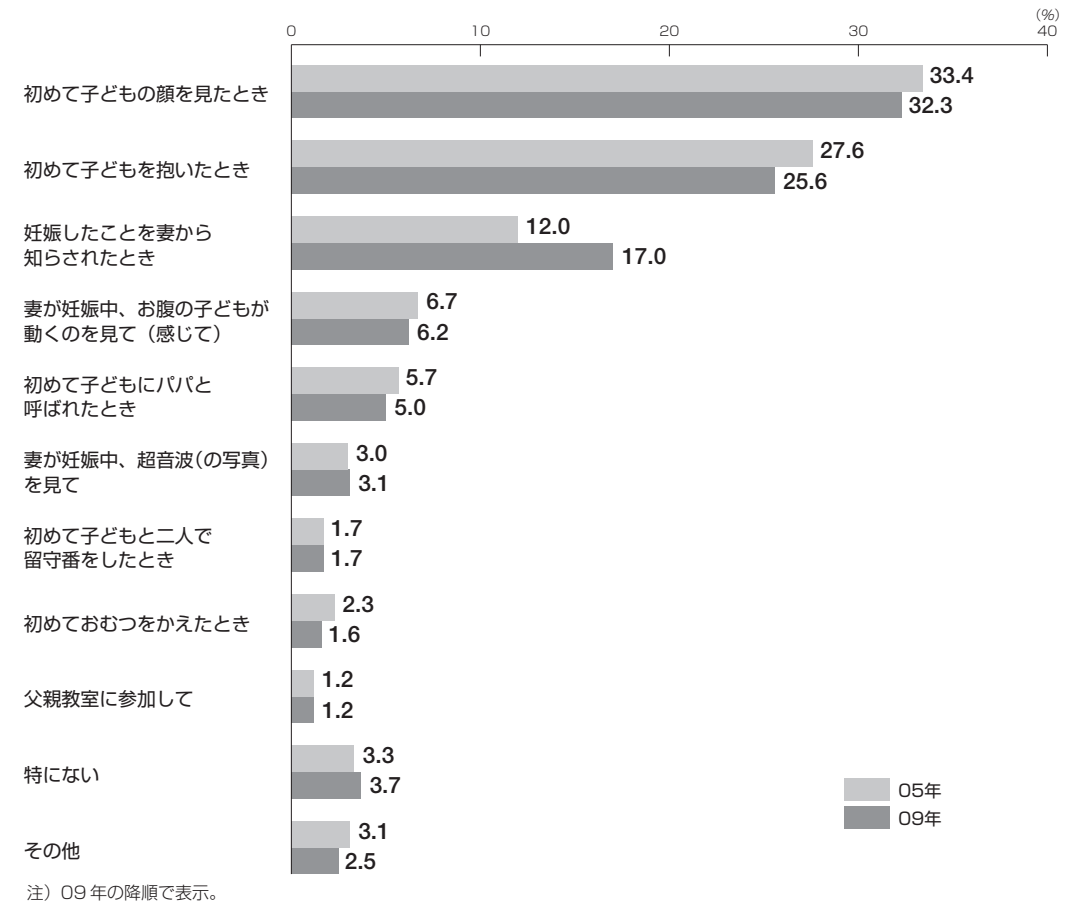
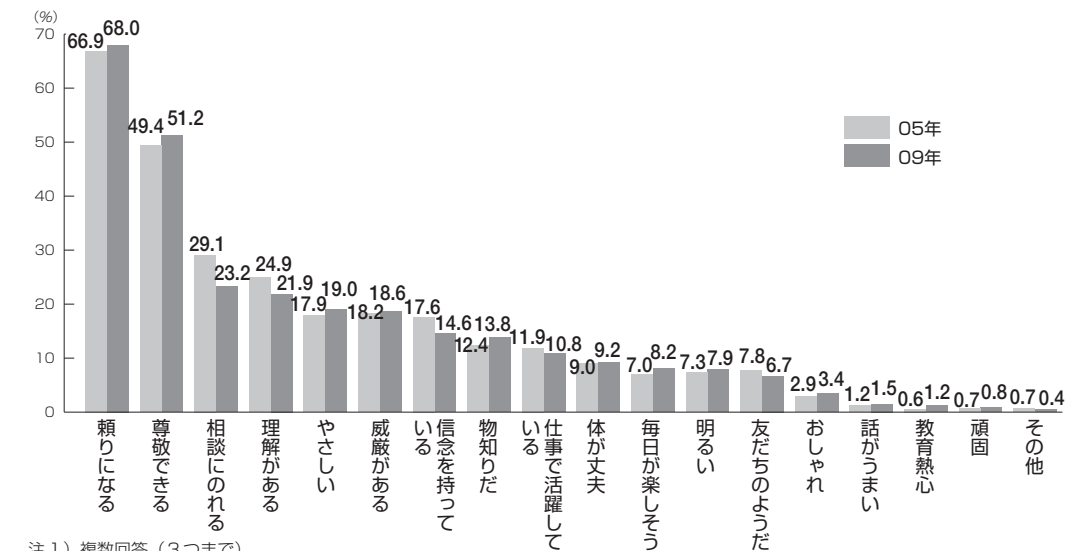


図1-3-2 理想的な父親イメージ(経年比較)



注1) 複数回答(3つまで)。

注2) 09年の降順で表示。

注3) 19項目中、18項目を表示(「特になし」を省略)。



◆8割以上の父親が子育ての楽しさや子育てによる成長を感じている。  
約7割の父親は、「子どもとの時間を十分にとれない」と感じている◆

図1-3-3で示したのは、父親の子育て意識に関する項目である。育児への肯定的な感情を示す項目として、育児の楽しさや子育てによる成長感など5項目をきいている。全体として「よくある」と「ときどきある」を合わせて8～9割であり、総じて高い比率となっている。また、4年前と比較しても比率に変化はみられず、一貫して肯定感が高い状態である。

育児への否定的な感情を示す4項目のうち、09年は「子どもが小さいうちは、自分のやりたいことが十分にできない」「子どもとの時間を十分にとれない」「子どもが将来うまく育っていくかどうか心配である」といった育児による負担感や不安感を感じる父親は、「よくある」と「ときどきある」を合わせて、6～7割を占めている。また、「子どもとの接し方に自信が持てない」は4割である。4年前と比べると、「子どもとの時間を十分にとれない」の比率が6.6ポイント減少し（05年76.4%→09年69.8%）、「子どもとの接し方に自信が持てない」の比率が3.5ポイント増加している（05年36.5%→09年40.0%）。やや減少はしたものの、約7割の父親が子どもとの時間が十分にとれないと感じていることから、乳幼児期の父親にとって、子どもと一緒に過ごす時間を確保することは4年前と変わらず課題となっている様子がうかがえる。

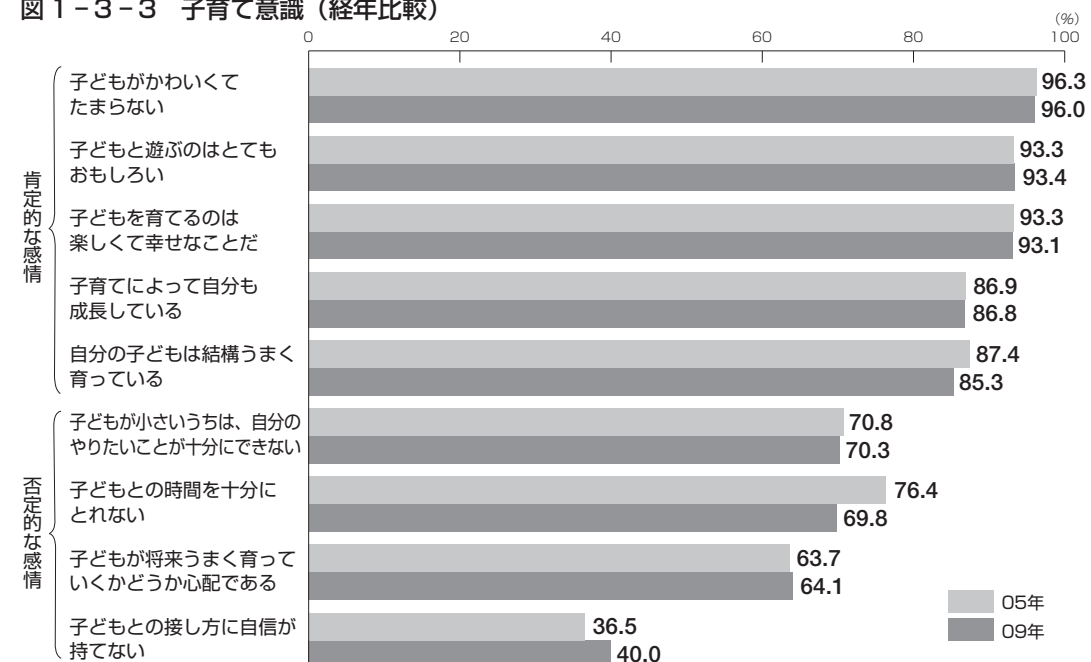
◆子育て情報で頼る人やものをより多く持つ父親のほうが、子育て肯定感が高い◆

子育ての肯定感や否定感、子育ての情報を得たいときに頼れる人やものの存在と関連するのだろうか。図1-3-4・5は、「子育て情報を得たいときに頼っている人やもの」との関連をみた図である。「あなたが、普段子育て情報を得たいときに、頼っている人（もの）はどれですか（5つまで選択）」ときいたもので、頼っている人やものを選択した数の多い順に4グループにまとめ、子育ての肯定感や否定感との関連をみた。「子どもがかわいくてたまらない」（子育て肯定感）では、子育て情報で頼っている人やものの種類が多いほど、「よくある」の数値が高くなり、選択数が少なくなるにつれて「よくある」の数値も低くなる傾向にあった。一方、「子どもが小さいうちは、自分のやりたいことが十分にできない」（子育て否定感）では、子育て情報で頼る人やものの数との関連性はあまりみられなかった。

◆約4割の父親は、地域に父親の居場所や相談場所（人）がないと感じている◆

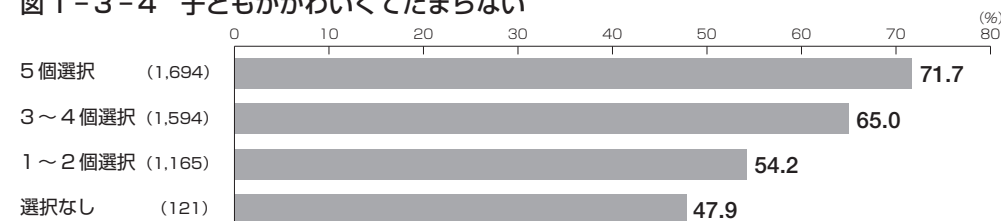
図1-3-6は、地域における父親の居場所や父親の子育ての相談場所・人についてきいたものである。「地域の公園や子育て施設では、父親の居場所がない」と感じている比率は40.7%（「よくある」＋「ときどきある」、以下同）、「父親として子育ての悩みを相談できる人（場所）がない」と感じている比率は35.6%であった。子育ては地域の中で行うものであるが、地域での居場所や相談先がないと感じている父親は3～4割を占めており、地域の中での乳幼児期の父親の孤独な子育ての様子がうかがえる。

図1-3-3 子育て意識（経年比較）



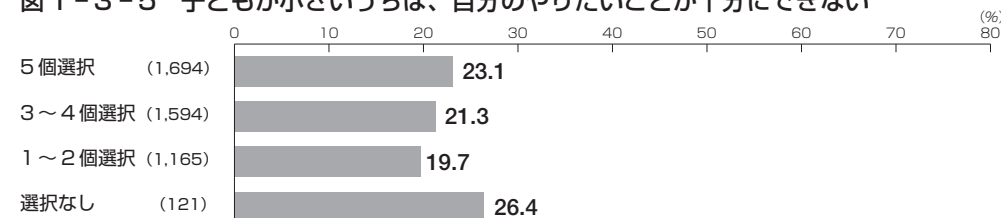
注) 「よくある」＋「ときどきある」の%。

図1-3-4 子どもがかわいくてたまらない



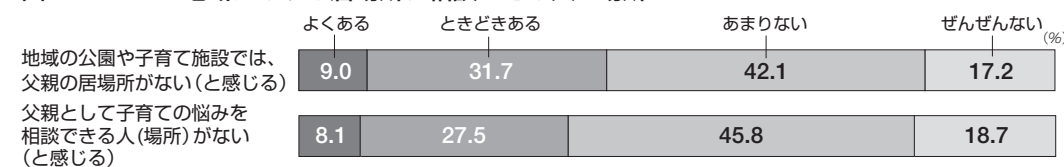
注1) 「よくある」の%。  
注2) 「子育て情報で頼る人やもの」の選択数により4グループに分けている。  
注3) ( )内はサンプル数。  
注4) 「子育て情報で頼る人やもの」の詳細の項目と数値については、巻末の基礎集計表⑬を参照されたい。

図1-3-5 子どもが小さいうちは、自分のやりたいことが十分にできない



注1) 「よくある」の%。  
注2) 「子育て情報で頼る人やもの」の選択数により4グループに分けている。  
注3) ( )内はサンプル数。  
注4) 「子育て情報で頼る人やもの」の詳細の項目と数値については、巻末の基礎集計表⑬を参照されたい。

図1-3-6 地域における居場所、相談できる人・場所



◆子育てで力を入れたいことは、「他者への思いやりを持つこと」  
「基本的な生活習慣を身につけること」「興味や関心を広げること」◆

図1-3-7は、日々の子育てでどんなことに力を入れて子どもを育てたいかについてきたものである。09年で「とても力を入れたいと思う」の数値が高かった項目をみると、「他者への思いやりを持つこと」(73.7%)、「基本的な生活習慣を身につけること」(63.2%)、「興味や関心を広げること」(60.8%)であった。その一方で、「数や文字を学ぶこと」(32.4%)、「芸術的な才能を伸ばすこと(音楽や絵画など)」(18.9%)、「外国語を学ぶこと」(18.2%)など、文字・数や芸術、語学などの学びに関する項目は比率が低く、それよりも人とかかわりや興味・関心を伸ばすことに力を入れたいと思う父親の子育て観がうかがえる。

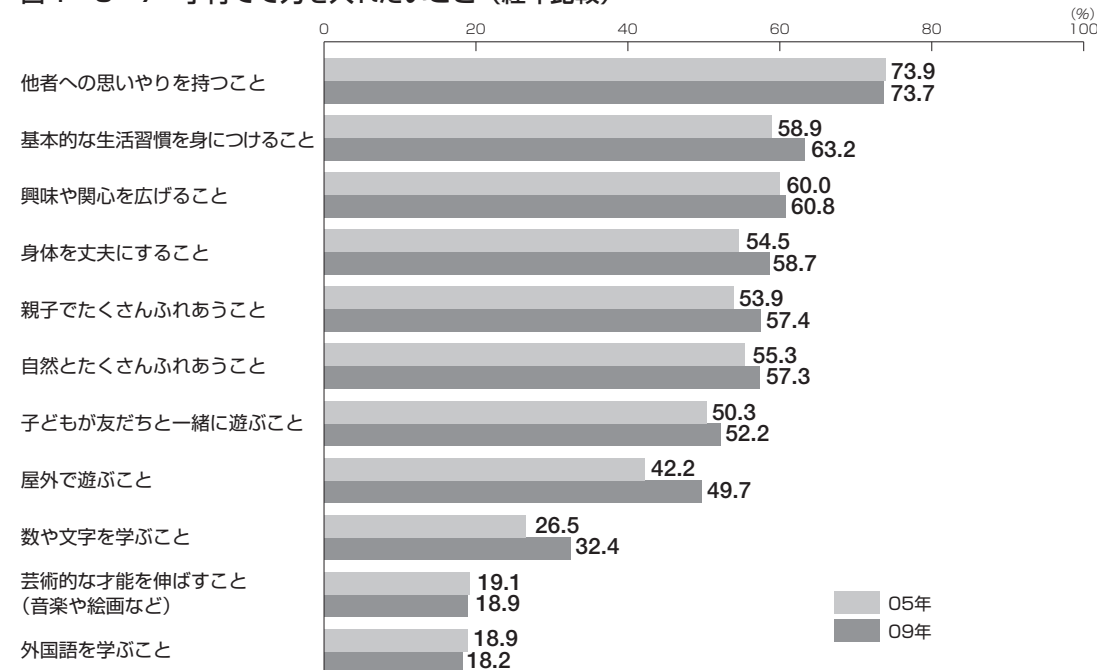
05年と比較しても全体的な数値の傾向はほぼ同じである。05年より増加した項目は「基本的な生活習慣を身につけること」(05年58.9%→09年63.2%、4.3ポイント差)、「身体を丈夫にすること」(05年54.5%→09年58.7%、4.2ポイント差)、「屋外で遊ぶこと」(05年42.2%→09年49.7%、7.5ポイント差)、「数や文字を学ぶこと」(05年26.5%→09年32.4%、5.9ポイント差)である。とくに「屋外で遊ぶこと」「数や文字を学ぶこと」は大きく増加している。

◆子どもに大学卒業以上を望む父親は83.9%。05年に比べて  
「大学卒業まで」は5.4ポイント増加している◆

現段階で、子どもをどの程度まで進学させたいかをきいた(図1-3-8)。09年では、「大学卒業まで」78.0%、「大学院卒業まで」5.9%と大学卒業以上の学歴を望んでいる父親は83.9%である。05年と比べると、「大学卒業まで」が5.4ポイント増加し(05年72.6%→09年78.0%)、「中学校卒業まで」「高校卒業まで」「専門学校卒業まで」「短大卒業まで」「大学院卒業まで」が微減している。

対象の子どもの性別でみた結果は図1-3-9である。09年で大学卒業以上(「大学卒業まで」+「大学院卒業まで」、以下同)の比率をみると、男子を持つ父親は88.3%であるのに対して、女子は79.0%で、9.3ポイントの差である。05年と比較すると、男子では大学卒業以上の比率は3.2ポイントの増加(05年85.1%→09年88.3%)、女子では5.0ポイントの増加(05年74.0%→09年79.0%)で、男女ともに増加しているが、女子のほうがやや増加率が大きくなっている。これには、妻(母親)の高学歴化(大学卒業以上の比率が4年前に比べて6.4ポイント増加)が背景として考えられる(05年27.7%→09年34.1%、図表省略)。さらに、父親自身の学歴による差をみると(図1-3-10)、子どもに大学卒業以上を望む比率は、大学卒業以上の父親では92.8%、中学校、高等学校、専門・専修学校、短期大学を卒業した父親は65.8%で、差は24.3ポイントとなる。父親の学歴による子どもへの進学期待にも大きな違いがみられる。

図1-3-7 子育てで力を入れたいこと(経年比較)



注)「とても力を入れたいと思う」の%。

図1-3-8 学歴期待(経年比較)

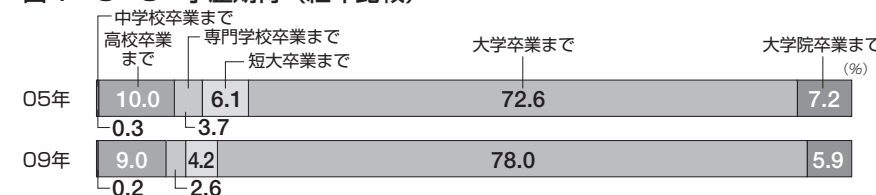
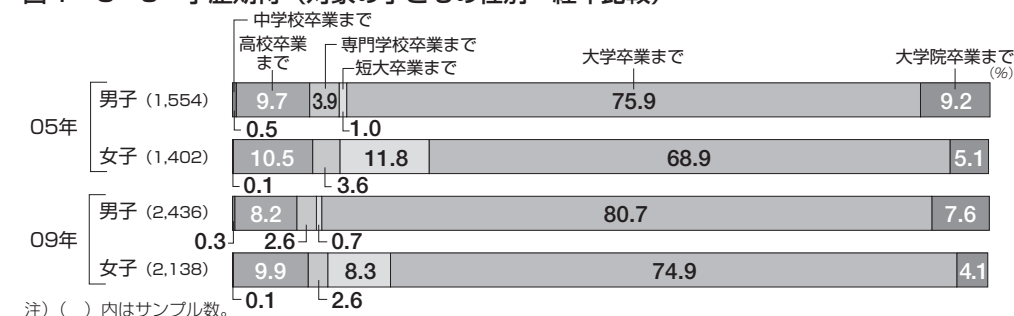
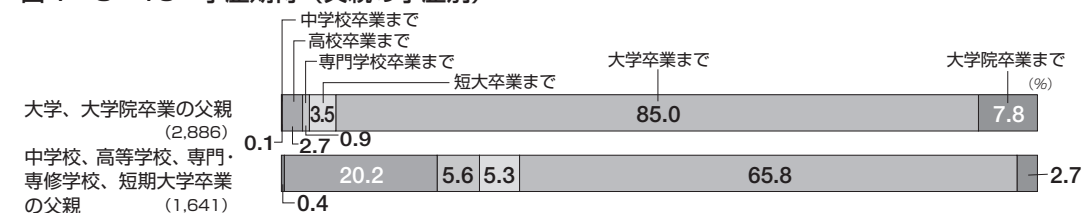


図1-3-9 学歴期待(対象の子どもの性別 経年比較)



注) ( ) 内はサンプル数。

図1-3-10 学歴期待(父親の学歴別)



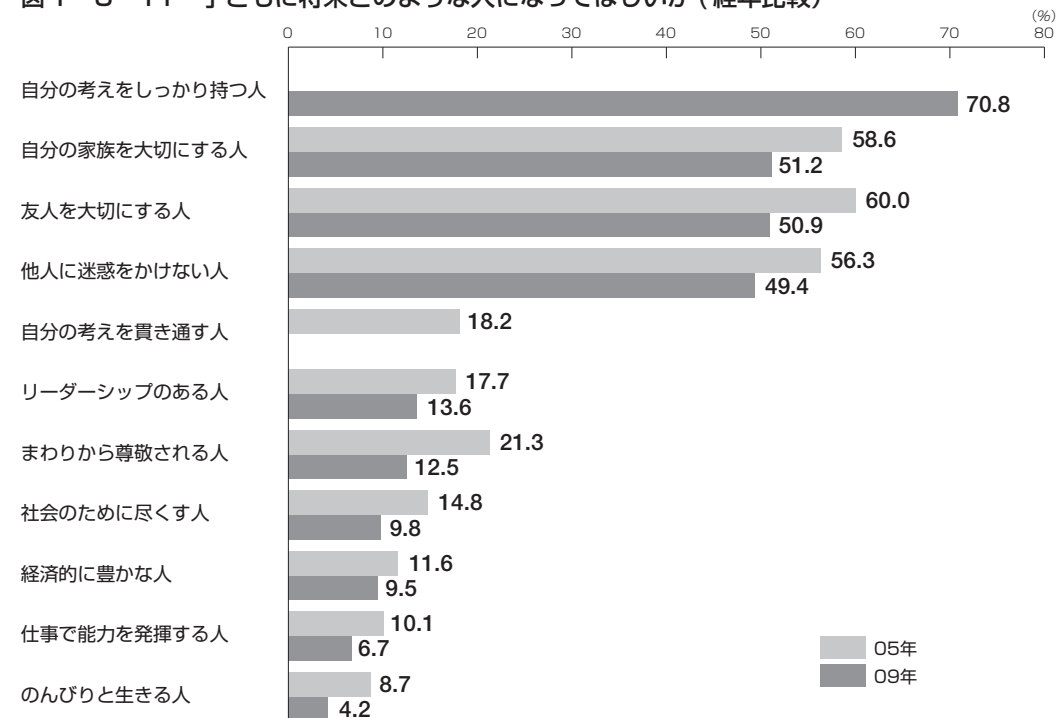
注) ( ) 内はサンプル数。

◆将来は「自分の考えをしっかりと持つ人」になってほしいという声が第1位◆

子どもに将来どのような人になってほしいかについてきいたものが図1-3-11である（10項目のうち、3つまでを選択）。09年は数値の多い順に、「自分の考えをしっかりと持つ人」（70.8%）、「自分の家族を大切にする人」（51.2%）、「友人を大切にする人」（50.9%）、「他人に迷惑をかけない人」（49.4%）である。このほかの項目は、2割を下回っている。09年は一部項目の表現を変えたため（05年「自分の考えを貫き通す人」→09年「自分の考えをしっかりと持つ人」）、05年との直接の比較は難しいが、05年では「友人を大切にする人」「自分の家族を大切にする人」「他人に迷惑をかけない人」が上位3位にきており、人間関係を重視する傾向は4年間で変わっていない。

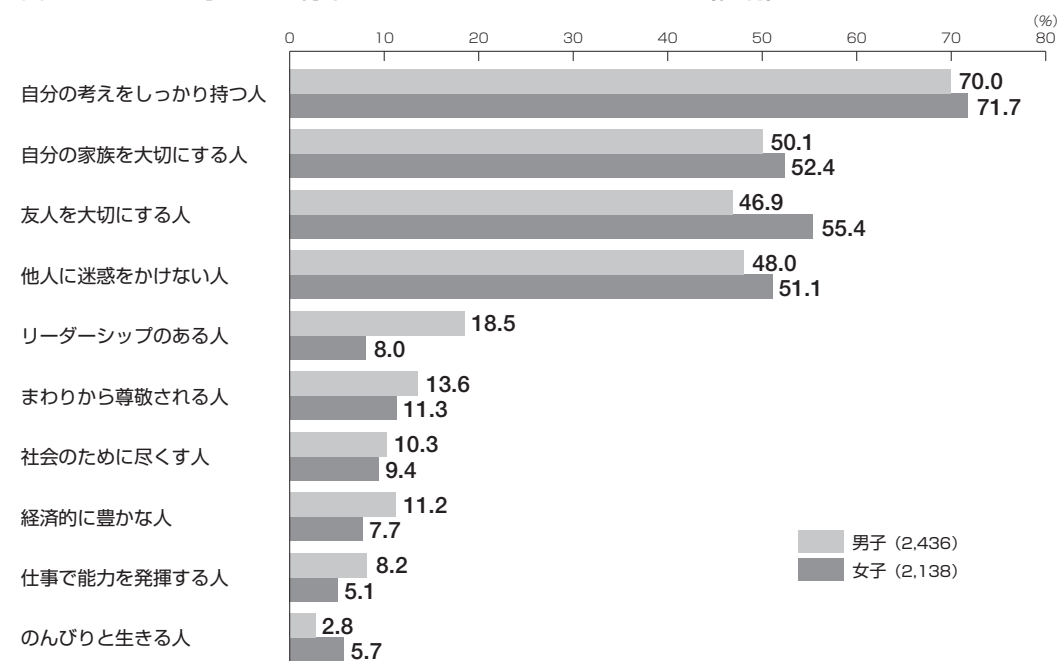
対象の子どもの性別によって将来に対する期待をみたものが図1-3-12である。男子のほうがとくに高かった項目は、「リーダーシップのある人」（男子18.5%>女子8.0%、10.5ポイント差）、「経済的に豊かな人」（男子11.2%>女子7.7%、3.5ポイント差）、女子のほうがとくに高かった項目は、「友人を大切にする人」（男子46.9%<女子55.4%、8.5ポイント差）、「他人に迷惑をかけない人」（男子48.0%<女子51.1%、3.1ポイント差）などである。男子には社会的に活躍することを、女子には良好な人間関係を望んでいることがうかがえるが、これも4年前と変わっていない傾向である。「自分の家族を大切にする人」（男子50.1%、女子52.4%、2.3ポイント差）、「自分の考えをしっかりと持つ人」（男子70.0%、女子71.7%、1.7ポイント差）は、男女の差が少なかった。05年では、「自分の家族を大切にする人」は、女子のほうが男子よりも高い項目であったが（男子56.1%、女子61.4%、5.3ポイント差）、09年では男女でほぼ数値が並んでいる。

図1-3-11 子どもに将来どのような人になってほしいか（経年比較）



注1) 複数回答（3つまで）。  
 注2) 「自分の考えをしっかりと持つ人」は、09年のみの項目。  
 注3) 「自分の考えを貫き通す人」は、05年のみの項目。

図1-3-12 子どもに将来どのような人になってほしいか（性別）



注1) 複数回答（3つまで）。  
 注2) ( )内はサンプル数。



◆子どもに大学・大学院卒業の学歴を望む父親は、自分の考えをしっかりと持ち、リーダーシップをとれる人になってほしいという思いが強い◆

子どもへの学歴期待別に子どもの将来に対する期待についてみてみよう。子どもに大学・大学院卒業の学歴を望む父親と中学校、高等学校、専門学校、短期大学卒業の学歴を望む父親に分けてみると図1-3-13のようになる。大学・大学院卒業の学歴を望むグループのほうが高かった項目は、「リーダーシップのある人」(7.6ポイント差)、「自分の考えをしっかりと持つ人」(5.7ポイント差)、「社会のために尽くす人」(4.7ポイント差)、「仕事で能力を発揮する人」(3.8ポイント差)、「経済的に豊かな人」(3.4ポイント差)、「まわりから尊敬される人」(3.3ポイント差)である。一方、中学校、高等学校、専門学校、短期大学卒業の学歴を望むグループのほうが高かった項目は、「他人に迷惑をかけない人」(11.6ポイント差)、「自分の家族を大切にする人」(6.6ポイント差)、「友人を大切にする人」(5.2ポイント差)である。子どもに大学・大学院卒業の学歴を望む父親は、自分の考えをしっかりと持ち、リーダーシップをとれる人になってほしいという思いが強く、中学校、高等学校、専門学校、短期大学卒業の学歴を望む父親は、身近な人間関係を大切にすることを望んでいることがうかがえる。

◆父親として今後不安なことは、「将来の子どもの教育費用」「育児費用の負担」「自分の収入の減少」である◆

父親として今後不安なことについて複数回答できた(図1-3-14)。09年は数値の多い順に、「将来の子どもの教育費用が高いこと」(70.2%)、「育児費用の負担が大きいこと」(61.4%)、「自分の収入が減少しないかどうか」(48.5%)であり、上位3位までは、教育費用や育児費用など、経済的なことに関する項目となった。その後、「子どもを育てるには不安な社会であること」「子どもが無事に元気に育つかどうか」といった社会的な項目、次に「自分の体の健康」「自分が失業しないかどうか」という自分自身のことに関する項目、「住宅の購入費用が高いこと」「家が狭いこと」といった住居に関する項目が続く。05年よりも全体の項目数が増えているため、直接の比較はできないが、05年では、第1位「将来の子どもの教育費用が高いこと」、第2位「子どもを育てるには不安な社会であること」、第3位「育児費用の負担が大きいこと」であり、社会への不安が第2位にきていた。

父親の個人年収を3つのグループに分けてみたものが図1-3-15である(年収400万円未満、年収400万円以上600万円未満、年収600万円以上)。年収400万円未満のグループでは「将来の子どもの教育費用が高いこと」「育児費用の負担が大きいこと」「子どもを育てるには不安な社会であること」「自分が失業しないかどうか」「住宅の購入費用が高いこと」「家が狭いこと」でほかのグループと比べて比率がもっとも高くなっている。一方、年収600万円以上のグループでは「子どもが無事に元気に育つかどうか」で比率がもっとも高い。「自分の体の健康」と「自分の心の健康」はグループ間による差はみられなかった。年収400万円未満では、教育や育児費用の負担、住宅の購入費用の負担や狭さについてより不安を感じている様子が見られる。

図1-3-13 子どもに将来どのような人になってほしいか(子どもへの学歴期待別)

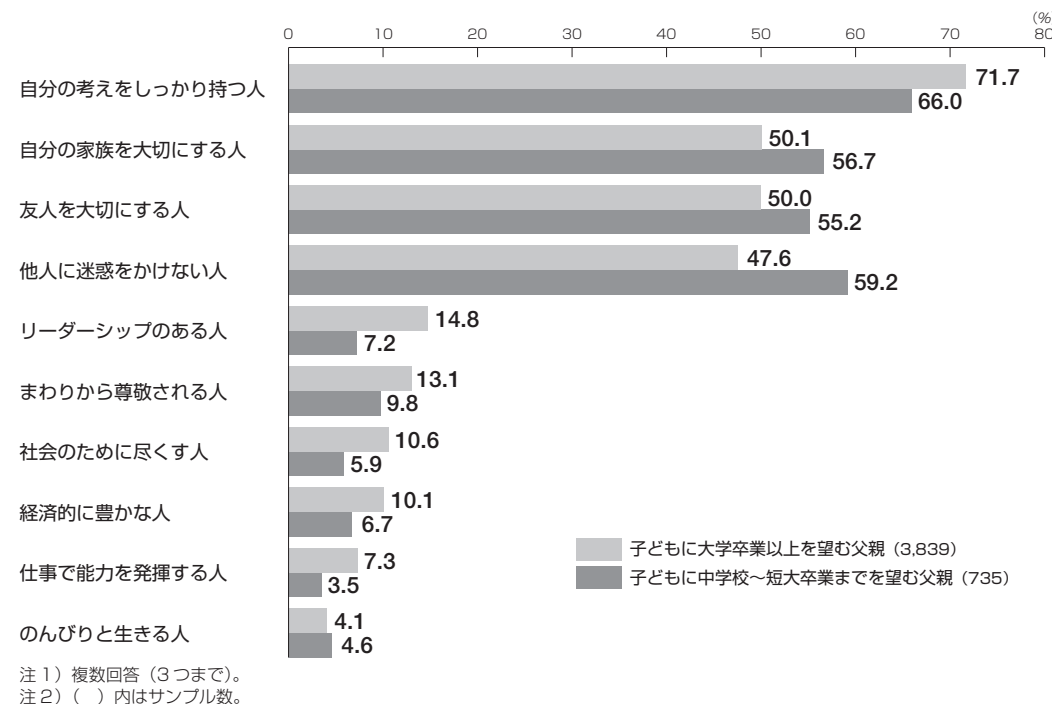


図1-3-14 父親として今後不安なこと(経年比較)

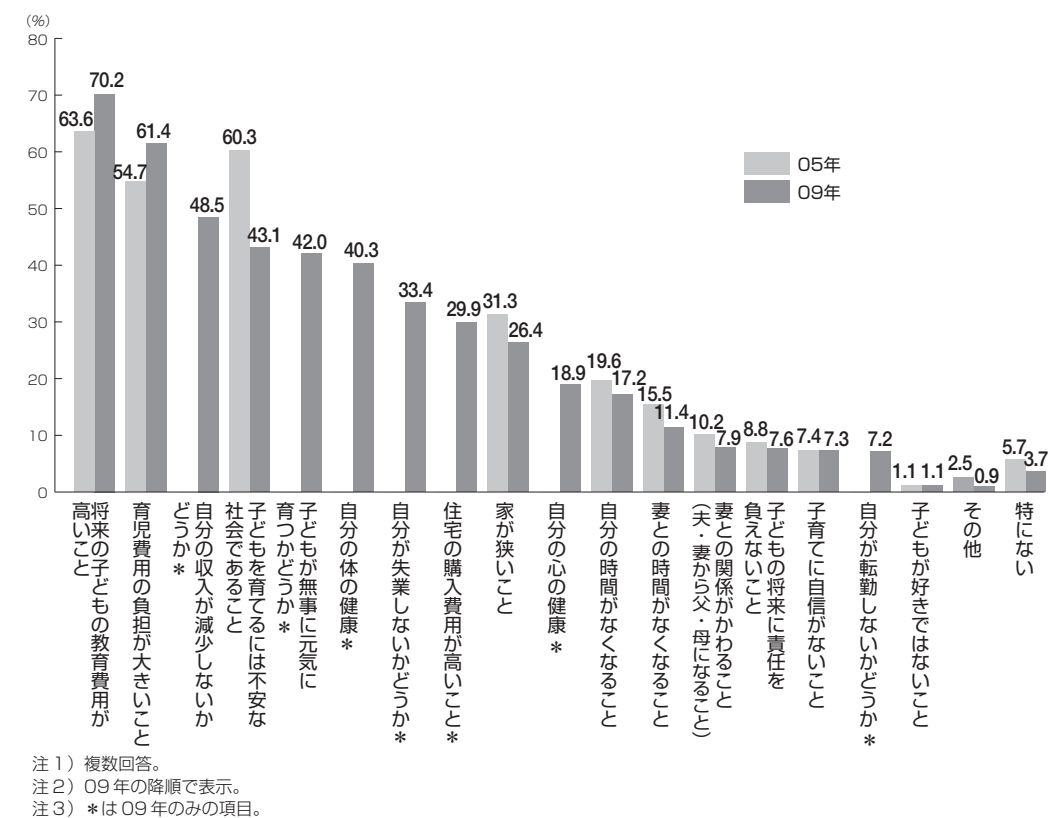
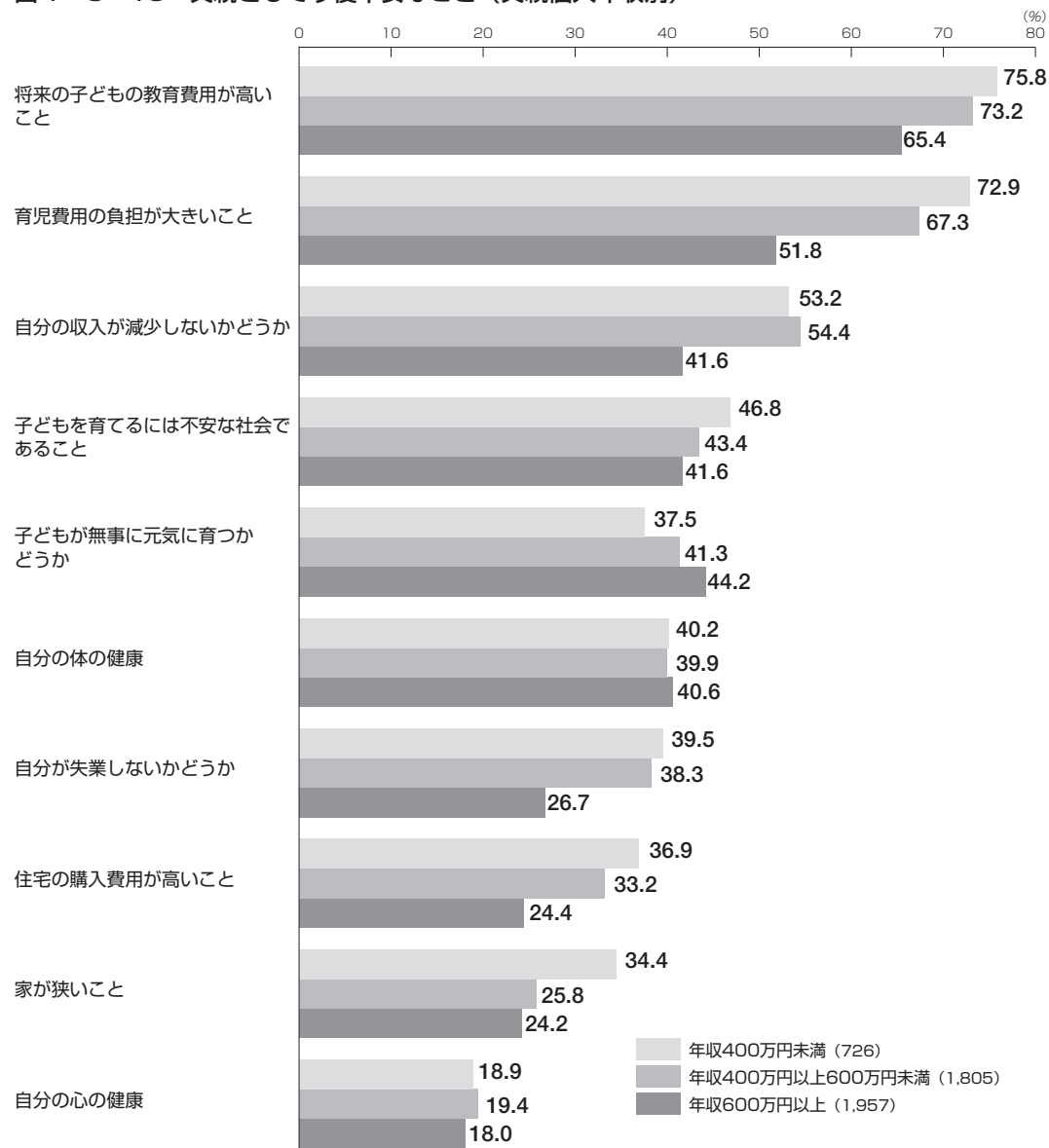


図1-3-15 父親として今後不安なこと（父親個人年収別）



注1) 複数回答。  
 注2) 19項目のうち、09年全体で上位10項目を表示。  
 注3) ( )内はサンプル数。

◆20代は、育児費用の負担や住居、自分の時間がなくなることへの不安、40代は、将来の教育費用、自分自身の収入や心身の健康に対する不安が高い◆

次に、父親の年代別（20代、30代、40代）にみてみたい（表1-3-1）。20代の父親がほかの年代よりも高い項目は、「育児費用の負担が大きいこと」「住宅の購入費用が高いこと」「家が狭いこと」「自分の時間がなくなること」「妻との時間がなくなること」である。20代の父親の子どもは年齢が低い子どもが多いため、現在の育児にかかる費用が大きく影響を及ぼすのだろう。また、子どもが生まれ、家族が増えることで住宅に狭さを感じ、転居を考えることが多い時期でもある。自分の時間や妻と過ごす時間もなくなることへの不安もうかがわれる。40代の父親がほかの年代より高い項目は、「将来の子どもの教育費用が高いこと」「自分の収入が減少しないかどうか」「子どもを育てるには不安な社会であること」「自分の体の健康」「自分の心の健康」である。子どもが成長するにつれて少し先の小学校以降の教育費用への不安が出てくるとともに、将来の収入への不安、体や心の健康といったこれからの自分自身のことに関して不安を感じる比率がより高くなっていることがわかる。30代の父親では、ほかの年代より高いのは「子どもが無事に元気に育つかどうか」「自分が失業しないかどうか」の2項目であるが、「将来の子どもの教育費用が高いこと」や「自分の収入が減少しないかどうか」といった40代の父親の持つ不安も同様に高い項目としてあげられている。

表1-3-1 父親として今後不安なこと（年代別）

	20代 (332)	30代 (3,144)	40代 (1,098)
将来の子どもの教育費用が高いこと	64.2	70.3	71.7
育児費用の負担が大きいこと	66.9	62.5	56.5
自分の収入が減少しないかどうか	45.2	48.4	49.9
子どもを育てるには不安な社会であること	33.7	42.8	46.5
子どもが無事に元気に育つかどうか	36.7	42.6	41.7
自分の体の健康	30.1	38.3	49.1
自分が失業しないかどうか	28.6	33.9	33.3
住宅の購入費用が高いこと	41.3	30.7	24.1
家が狭いこと	29.5	25.7	27.2
自分の心の健康	15.4	18.4	21.2
自分の時間がなくなること	22.6	17.7	13.8
妻との時間がなくなること	16.6	11.4	9.7

注1) 複数回答。  
 注2) 19項目のうち、09年全体で上位12項目を表示。  
 注3) ■は最大値。  
 注4) ( )内はサンプル数。